

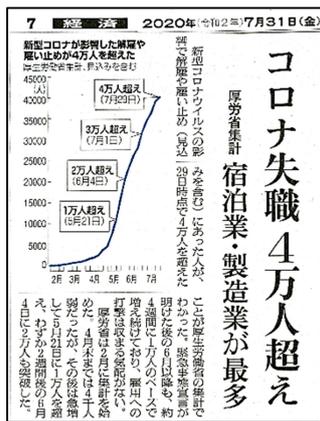
日本科学者会議 (JSA) 滋賀支部
NEWS LETTER

2020年8月8日発行 第58号
事務局長 水原 渉
TEL/FAX 0749-47-5169 (共通)
go-ma-me@hi3.enjoy.ne.jp

【報告】 滋賀県・中小企業のコロナ危機の状況
について

個人会員分会 宮川卓也

依然として収束のめどが見えない新型コロナウイルス感染症の蔓延と、有効な対策を実行できない行政への不信感からくる消費の後退は、県内中小企業の経営に深刻な危機をもたらしています。



5月から6月にかけて滋賀県中小企業家同友会が会員対象に行ったアンケート調査 (回答 81 社) では、1～3月期に比べて4～6月期の売り上げが減少した企業が 53.8%と、県内中小企業にかつてない大きな被害が出ている状況が鮮明になっています。さらに足元の景気が一層悪化すると考えている企業が 80%にのぼり、先行きに対しても、ほぼ“絶望的”と言っても過言ではない状況です。景況感に関する回答に関しては、同時期に実施された近畿の他府県の調査によると、兵庫 58.1%、奈良 65%、和歌山 58.8%、大阪 75%などと比べて滋賀や京都 (80.8%) の経営者マインドがより悪いことが特徴として挙げられます。京都は観光への依存が高く、それが起因しているのかもしれませんが、滋賀県の先行き不安感の高さは懸念されます。

また資金繰りについては、苦しいと答えた企業が、滋賀 43.2%、京都 31.2%、大阪 21.1%、兵庫 36.9%、奈良 21.9%、和歌山 20%と、こちらも滋賀県企業の苦戦が目立っています。

苦境を訴える経営者の悲鳴の一部をご紹介します。「イベントの中止、大型商業施設等の休業」、「コロナ感染問題で自動車メーカーの生産調整による受注減」、「客先に訪問出来ない為落ち込んでいる」、「リハビリデイサービスも利用者が3割ほどお休みされてい

る(コロナ感染が心配なので)」、「コロナの影響で訪問件数が低下、コロナにより経営状況に不安を感じられた会社のキャンセルも発生しており、計画以上の落ち込みとなっています」、「先行き不透明で着工延期」、「イベントが出来ないので講習会が開催できない。企業の活動が低下しているので受注が少ない。新人教育が出来ないので教育需要がない」、「新型コロナウイルス感染防止対策の影響で卸先の自粛閉店や観光地の得意先の不振、イベントの中止や学校関係の閉鎖に伴う直販部門の不振などが大きく影響し、売上が減少している」、「問い合わせ件数の減少。1件当たりの受注高の減少。見積途中での延期および中止。受注工事の取りやめ」、「2月末より予定のイベントが100%中止となった。また、開催自粛要請のため自社努力ではどうにもできない状況」、「コロナ対応により学校が休校となった影響大」、「緊急事態宣言発出にともなう施工工事の延期。外出自粛による消費マインドの低下」、「折り込み広告の収入が半減しています!」、「売り上げ比率 60%にもなる得意先の五輪特需が終わり、売り上げ減少。そこにコロナショックが輪をかけて、その他の取引先でも売り上げが伸び悩んでいる。得意先自体は社会インフラ、医療、介護、食品、アミューズメントなど多岐に渡るが、コロナの影響かどこも伸び悩んでいる」、「消費税増税の影響で見通しがよくなかったところに新型コロナウイルスの影響で大幅減。自動車メーカーの操業停止も大きな影響があった」、「コロナにより外出出来なくなり4月13日から営業自粛し売上がゼロに」、「コロナウイルスの影響により自動車関連の受注は5割減」、「海外製品が入荷せず、品物が完成しない為、生産調整が行われた。国内の建設業がストップし、生産依頼が延期になった」、「通常通り営業していたにもかかわらず、休業していると誤解されていた可能性はあると思う。」

コロナ危機が一向に収束に向かわない状況の中で、滋賀県中小企業家同友会では、8～9月にもさらに追跡調査をしていく予定です。

【論考】 発展的評価(伴走型評価)について

滋賀大学経済学部 中野 桂

大学に籍を置く者はすべからく「評価」の対象となる。数値目標を掲げることを求められ、進捗を管理され、外部評価を受ける。外部評価を受ける際には、証拠となる資料(エビデンス)の提出を求められ、その作業に教員も事務職員も奔走する。当初の理念はいつのまにか数値目標に置き換えられ、数値目標を達成することが目的化し、当初成し遂げようとしていたことはかたわらに追いやられる。そんな経験をされた方も多いのではないだろうか。

マイケル・クイン・パットン(Patton, 2011)により提唱された発展的評価(Developmental Evaluation)は、しばしば日本では伴走型評価と訳されるが、まさにこうした従来型の外部評価のあり方を問い直すものであった。ソーシャル・イノベーションなどの分野で注目されている考え方で、状況がはげしく変化するなかで、そうした変化に迅速に対応し当初に掲げた理念(数値目標ではなく)の実現を、評価の目的とする。

具体的には、評価者が評価対象により深くコミットして、必要に応じてアドバイスなどを行う。いわば参与観察の状態、何が起きているかは常時把握されているので、特に資料の提出などを求めずとも、評価者はもっとも的確なアドバイスをすることができる。

従来型の外部評価が外部への事後的な説明責任で「説明のための説明」に陥りがちであるのに対し、発展的評価(伴走型評価)は、刻々と変化する状況から取り組み事業者も評価者も共に学習し、その事業で目指したビジョンの達成にむけて、その事業の価値を引き出すための仕組みとなっている。そもそも評価(Evaluation)とは、良し悪しを判断するものではなく、価値(valuation)を「引き出す」(e; ラテン語前置詞の“e”は外へという意味)ものである。

従来型の外部評価は、PDCAサイクル(計画→実行→評価→改善)の中に位置づけられているものである。このサイクルを回すことで、事業が継続的に改善されるという考え方である。これは、変化が乏しい状態、あるいは右肩上がりの経済に代表されるように、将来ある程度予測可能な状態では有効なメカニズムであったかもしれない。

しかしながら、コロナ禍を見ればわかるように、現代は目まぐるしく状況が変わる「カオス(混沌)」の時代であり、そうした時代にふさわしい仕組みとして、OODAサイクルがある。OODAとは、Observation(観察)、Orient(方向づけ)、Decide(決定)、Act(行動)の頭文字を取ったものである。まずは状況を観察し、分析して、意思決定を行い、その上で行動をおこす。発展的評価(伴走型評価)はOODAサイクルに適した外部評価モデルであり、評価者はその全ての段階に関わる。

2018年より始まった休眠預金等の活用に際して、発展的評価(伴走型評価)の考え方が導入された。助成をうける民間公益団体に対して、資金分配団体等が常に寄り添いながらアドバイスを与えることで、取り組みの改善を行う試みが始まっている。

発展的評価(伴走型評価)は、当初、ソーシャル・イノベーションを担う非営利団体などに対して、その事業の性格上、状況の変化が激しいために考案された評価方式であった。しかしながら、大学はもとより、もはや社会全体が荒波のような中であって、この新しい評価方式がこれからのスタンダードとなる必要があるし、そうでなければ未来は暗いと言わざるを得ない。



【コロナ禍雑感】 芸術文化は精神の「スパイス」?

個人会員分会 (NL 編集担当) 沖野良枝

本号では、コロナ禍における滋賀県内中小企業の調査報告と新しい教育、事業評価法の提案がなされた。

それに伴い思い至ったことがある。先日、コロナの影響で全公演が中止や延期されたびわ湖ホールで、約4か月ぶりに公演が再開された。当日は国内外で注目のカウンターテナー・リサイタルであった。透明な声に心を洗われた一方で、精神にピッと響いた歌があった。それは「Pray Not Amen」(作詞 サラ・オレイン)と言う曲で、“この地獄の底からでも 私は天国に祈らない 地球に天国が存在するのを知っているから 救いの手は差し伸べられる 日々の行いは必ず報われる 探せばきっと道は見つかる 祈らない、アーメン”とあった。沼尻芸術監督は、芸術文化は心の「ビタミン」と述べた。加えて精神の「スパイス」でもあるなと感じながらホールを後にした。